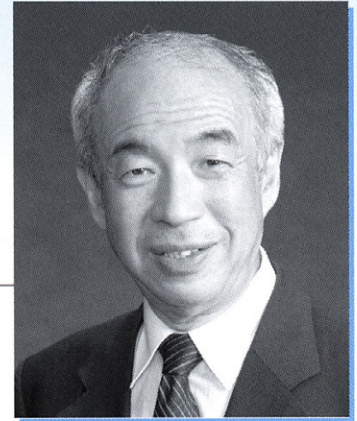


多く残されている建築の研究

一般社団法人日本建築学会会長

和田 章



建築はすべての人々が毎日の生活や活動を行う場であり、建築に携わる人々は非常に多く、業種も多様である。このなかで、新しく開発された素晴らしい技術は、多くの関係者に次々に応用されてほしい。技術開発を進めるにあたり、異なった組織に属する研究者が互いに競争することにも意義があるが、人々にとって共通の課題については、組織の枠を超え協力して取組む方法が有効である。創立十周年を迎える建築研究開発コンソーシアムの要としての役割は後者にあると思う。さらなるご活躍を期待いたします。

シカゴから自動車産業の都市デトロイトに行く途中にヘンリー・フォード・ミュージアムがある、正面にはフォードの手形とエジソンの手形が並んでおかれ、二人の偉大な技術者は同じ時代に生きていたことが分かる。ここには、フォードが百年以上前から毎年発表してきた新型の乗用車がすべて順に並べられている。はじめの乗用車は馬車の馬の代わりにエンジンを付けたようなかたちで、その後も同じようなかたちの車が作られていったが、これらは徐々に変化し、最終的に今のかたちの乗用車になっている。毎年の新型車が順に並んでいるから、その変化を見ることができると、隣同士ではよく見比べないとその改良点は見つからない。ただ、このようにして百年の改良が続くと、かたちや技術には大きな変化が生まれる。

建築の変化にも同じことがいえる。明治の初期に建設された日本銀行本店、大正のはじめに建設された東京駅など、いくつかの重要な建築が今でも残っているが、現在に新しく建設される建築と百年前の建築は相当異なる。フォード・ミュージアムに並ぶ車のように、年々技術開発を進めているものの、一年ごとの違いを見つけることは簡単ではない。しかし、二十年、五十年、百年と年月が積み重なると、ここに大きな違いが生まれてくる。国の研究所、大学の研究、企業の研究など、建築に関わる研究は日々行われていて、ゆっくりではあるが、長い年月を経て日本の建築、世界の建築は大きく変わっていく。

乗用車の場合でも建築の場合でも、長い年月の間には将来への変化の兆しとなる出来事や基本思想の変革が起こる。建築構造の分野では、大きな地震災害がこれに当たり、研究開発の方向を変える最も大きな力になり、地震国において超高層建築を建てたい、屋内野球場が欲しい、ワールドカップの開催で世界に負けないスタジアムを建てたいなどの市民の強い要求が研究開発の方向を決めていく。環境分野では人々にとって快適な空間を作ることが基本であるが、これには1972年にローマクラブが提言した「成長の限界」が人々の目を覚まし、1992年の環境と開発に関するリオ・デ・ジャネイロ宣言の「人類は持続可能な開発に対する関心の中心にある。人類は自然と調和して健康で生産的な生活を送る権利がある。」で始まる27の原則が大きな考え方の変革の力となっているに違いない。

2011年3月11日に起きた東日本大震災は、世界でも科学技術・防災技術が進んでいると思われていた日本に大きな衝撃を与えた。この思いが過信であったことは間違いなく、数百年に一度、場合によっては千年に一度の自然の災いについても、我々は真剣に考えなければならないことをはっきりさせた。日本の人口の六千人に